奈良県

施設なすのIPM実践指標モデル

次の管理項目や管理ポイントを例にして、
地域の病害虫や雑草の防除状況に応じたモデルをつくり
IPMに取り組みましょう。

管理項目	管理ポイント	取り組みの○×チェック	
		昨年は？	今年は？
健全な苗の定植	定植苗は、病害虫の発生・加害のない健全苗を使用する。		
	青枯病、半身萎凋病等の予防のため、その病害に抵抗性のある穂木、台木を利用する。		
ほ場の環境整備	ほ場への雑草種子の持込や、雑草を発生源とする害虫の飛び込みを押さえるため、ほ場周囲の雑草防除に努める。		
	ほ場の排水を確保する。		
	ほ場の湿度が上昇しそうな時は換気に努める。		
	防除効率が高くなるように、薬剤散布作業が容易になるように十分な通路幅をとり、薬液がかかりやすい仕立て方にする。		
定植	品種に応じた適切な植え付け密度とする		
耕種的防除	ナス科以外の作物と輪作し、土壌病害を予防する。		
	剪除した枝や摘除した病害虫被害果は、古い肥料袋などに入れてほ場外に持ち出し、処分する。		
	太陽熱を利用して、土壌消毒を行う。		
	適切な整枝・剪定を行い、通風・採光を図る。		

管理項目	管理ポイント	取り組みの ○×チェック	
		昨年は？	今年は？
物理的防除	シルバーマルチ、防風ネットなどを用いて害虫の侵入量を減らす。		
	畝をマルチフィルムなどで覆い、雑草を抑える。		
生物農薬の利用	BT剤、拮抗微生物殺菌剤などの微生物農薬を利用する。		
	カブリダニ製剤、寄生蜂製剤など、節足動物天敵資材を導入する。		
病害虫発生予察情報の活用	病害虫防除所の発表する発生予察情報を確認する。		
病害虫防除の要否の判断	粘着トラップで微小害虫のモニタリングを行う。		
	病害虫の発生状況を観察し、防除が必要と判断された場合は確実に防除する。		
化学的防除	薬剤感受性の低下を遅延させるため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。		
農薬安全使用	雑草の発生状況や種類などを確認し、適切な除草剤を選ぶ。		
	十分な薬効が得られる範囲で最小の使用量となる最適な散布方法を検討した上で、使用量、散布方法を決定する。		
	農薬ラベルに書かれている使用基準を守る。		
	例年の病害虫・雑草の発生状況や、病害虫発生予察情報を考慮して薬剤を選ぶ。		
作業日誌の記帳	各作業の実施日、病害虫・雑草の発生状況、使用農薬の種類、使用量等、栽培管理状況を記録する。		
	作業日誌は、おおむね3年間保管し、次作の参考にする。		
研修会への参加	県や出荷組織、研究会などが開催する研修会に参加し、情報収集に努める。		